歴研おかやま
okayama history research society

第２２号
平成３０年 ７ 月１５日発行
会　員　募　集　中
年会費　　3,000 円
10月以降入会 1,500 円

平成 30 年度定期総会開かれる

新会長に、石井　保氏が就任

新会長　石井保氏の挨拶

去る 4 月 28 日、岡山県立図書館で平成 30 年度の定期総会が開かれた。約 80 名が参加。山崎副会長等から平成 29 年度の事業報告、決算報告、並びに監査報告があり、審議、承認された。次いで、平成 30 年度の計画案、予算案が提案され、承認された。

そして今年度は役員改選期。これまで会長を務めて来られた大田氏が自社の会社運営、並びに古里、川上町の創生により力を注ぎたいとして、会長の退任を強く要請されたことから、これまで顧問を務めていただいてきた石井保氏が新しい会長に選出された。そして、運営委員に新たに 3 人、井上知明氏、高橋義雄氏、藤井義和氏が加わる案が提案され、承認された。代表して、新会長に選ばれた石井保氏より就任の挨拶をいただいた。

新会長　石井　保氏

高橋義雄氏

藤井義和氏

井上知明氏

歴・研・展・望

歴史探求への道

平成の時代に入り、たまたま国重要文化財、備中松山城本丸復元に関わることになった。

備中松山城整備員、文化庁、岡山県教委、その他の関係者に城の歴史について学びました。当時、用語も分からない私にとっては学びの連続だった。岡山県では初めての城の復元でもあった。近代工法では無く、全く築城時代に即した工法で施工され、古式に則った櫓の上棟式では想いを込めて紅白の綱を引っ張った。その時、はじめて歴史の重要さ、奥深さを知り、歴史上の人物の偉大さも少し判った。それが方谷会への入会となり、後の岡山歴史研究会の発足とともの入会となった。

岡山歴研の皆様の研究は多岐にわたり、私の知らないことばかりであった。今は備中松山城本丸復元時の斬新な気持ちを再びと願っている。

鎖国の江戸時代では外国の文化が入らず、日本独特の文化が発達した。歌舞伎であり、箏曲、尺八、長唄、小唄、更に地域の伝統文化であった。藩校、私塾、寺子屋の発展により、識字率も高く、明治初期の調査では岡山県は私塾、寺子屋数は 1,000 を超え、長崎、山口に次ぎ、全国 3 位であった。

研究は、太古、古代、中世、近世、近代と時代は異なっても、その一つ、一つに探求の価値があり、先祖を知る楽しさもある。探求の精神を失わず楽しく、手を取り合って進みたいと願っている。ご指導をお願いします。

（会長　石井　保）

定期総会記念講演

「維新前後それぞれの願いを探る」

講師：*定兼（さだかね）　学（まなぶ）　氏*（岡山県立記録資料館　館長）

定期総会の後、記念講演として定兼　学氏による「維新前後それぞれの願いを探る」と題する講演が行われた。

定兼学氏は、昭和 55 年広島大学文学部卒業、文学博士。岡山県内の高校教師を務められた後、岡山県立記録資料館に席を置かれ、現在、館長を務められる。専攻は近世史。

明治維新前後、幕末から明治、そして廃藩置県、県内各地に県ができ、やがて岡山県に収斂するまでに岡山県内の各地でいろいろの騒動、出来事、その時代を生きた人々の行動があった。それらを表す以下の 6 件の資料をもとに映像を使いながら当時の諸事情を話された。

慶応 2 年　東北条郡行重村百姓代 直吉郎の願い
慶応 4 年　備中松山領民の願い
明治 2 年　久米北条郡福田上村 香川利七の願い
明治 6 年　美作民衆騒擾（血税一揆）
明治 6 年　小田県雇　犬養毅の休暇願
明治 7 年　兵士 萩原金五郎 帰省御願書

演者：定兼　学氏

明治維新と言えば一気に何もかもが変わった、新しくなったと思われがちであるが、岡山県内を見わたしてみてもさまざまな紆余曲折があり、行きつ、戻りつしながら時は流れ、変わっていったことがわかった。

若い人達の歴史離れに関する質問に応えて「民度の高い先達がいれば若い人たちもついてくる」と話されたのが印象的だった。

講演会「岡山の底力」シリーズ始まる

第 1 回「スピリット　オブ　オカヤマ」

講師：*臼井（うすい）　洋輔（ようすけ）　氏*（備前焼ミュージアム館長）

去る 3 月 31 日、岡山国際交流センターで、講演会「岡山の底力」シリーズの第 1 回目が開かれた。約 150 名が参加。第 1 回目は「スピリット　オブ　オカヤマ」という演題で臼井洋輔氏が講演を行った。

臼井洋輔氏

臼井氏は岡山の文化財を調べて、岡山文化の神髄を 5 つの星としてまとめられた。**1 つ目の特徴**は、世の中が混沌となる時代の境目に、先頭に立って新しい時代を引っ張ってきたのが岡山である。**2 つ目の特徴**は何をするにも常に異質の混在志向で臨み、存在するものすべて無駄なものは一切ないとして生かし切ってきた、そして全体が生き生きと輝いて思いもよらぬ好結果を常に示してきた。**3 つ目の特徴**は混在するのみならず、全体も細部も輝いて歪もなく、ミクロからマクロまで自由自在に捉え得る独特の美意識を長い歴史の中で積み上げてきた。**4 つ目の特徴**は独特の美しさや高品質の基準は「見えないモノ」こそ「見えるモノ」より大切にしてきてこそ生まれた。言い換えれば見えないモノにこそ力を注ぐのが「無敵」の岡山の文化の本質でもある。そして **5 つ目**は、岡山の人はどんなに窮地に立たされても、決して人真似をして急場をしのがず、時間がかかっても必ずユ

ニークな解決手段を見つけてきた、と説明された。

これらの特徴を吉備の国と言われてきた古代から近、現代までの岡山の歴史を紐解かれ、備前焼、備前刀、雪舟、宮本武蔵等を引合いに出されて説明され、岡山の精神の特徴を解説された。

その後「日本人が置き忘れてきた大切なもの…」という内容で岡山の歴史、文化の奥深さ、素晴らしさや現代の日本人が忘れている大切なもの等について、3 人の若手の芸術家、教育関係者を交えて臼井洋輔氏とで座談会が行われた。一人は笠岡市在住の芸術家、犬島プロジェクトで知られている川埜龍三（かわの　りゅうぞう）氏、一人は瀬戸内市在住の 3 児の母、川島ゆか氏、彼女は瀬戸内市の教育委員、男女共同参画推進審議会会長を務められ、幅広く活躍中。そしてもう一人は岡山県立大学で地域共同研究機構の特任講師を務められる栄　久美子（さかえ　くみこ）氏である。

若手と臼井氏の座談会

5 月度歴研サロン

古川克行氏講演　「どこで生まれた桃太郎さん」

会員　*井上　知明*

去る 5 月 10 日、歴研サロンが開かれ、「おかやま桃太郎の会」事務局長の古川克行氏を迎えて「どこで生まれた桃太郎さん」という講演が行われた。40 名が参加し、興味深く拝聴しました。

古川氏は昭和 41 年、岡山大学法文学部卒業後 RSK 山陽放送に勤務され、在職中から桃太郎に興味関心を持って研究されてきました。今回、御自身が作成された 6 本の DVD ビデオを用いて、岡山の桃太郎伝説を始め高松、犬山を含めた三大桃太郎伝説の地や、その他の桃太郎ゆかりの地の紹介、さらには桃太郎像の時代による変遷などをわかりやすく説明されました。

DVD ①　難波金之助の「桃太郎の史実をたどる」

岡山　難波金之助氏

桃太郎の昔話は全国に広まっている（約 680 話）が、桃太郎の生誕や活躍地として地名と結びついて語られる場所（伝説地）は全国に 7 ～ 8 箇所ある。そのうち岡山、高松、犬山が三大伝説地と言われている。その中で、岡山がよく知られるようになったのは、難波金之助氏の功績が大きい。

難波氏は昭和 5 年に『桃太郎の史実』を出版し、その中で、吉備津神社の狛犬土偶がその形から犬、猿、雉ではないかと思い、記紀などの古文献を探求するうちに、桃太郎の話は吉備津彦命の鬼退治に由来するものだという考えに至ったと述べている。家来の犬は犬飼健命、猿は楽楽森（ささもり）彦命、雉は留玉（とめたま）臣命であり、鬼ヶ島は鬼ノ城山とした。付近には吉備津神社、楯築（たてつき）遺跡、鯉喰（こいくい）神社、血吸川、鬼の岩屋、鬼の墓、鬼の釜など、関連した神社や遺跡が多数存在する。

難波氏より前の明治期には廣榮堂の武田浅次郎氏が、桃太郎の衣装を着け「日本一の吉備団子」と書いた旗を持って広島の宇品港に帰ってきた日清戦争の凱旋兵に吉備団子を宣伝し、吉備団子と桃太郎が広く知られるようになったという。

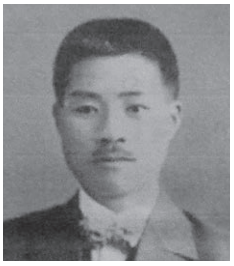
昭和 37 年の岡山国体（三木「桃太郎」知事の活躍）や昭和 47 年の山陽新幹線岡山開通に合わせた積極的な PR なども、岡山の桃太郎が定着するのに役立った。

DVD ②　みさき桃太郎伝説

岡山県内には久米郡美咲町にも桃太郎伝説がある。町内には桃太郎伝説に登場する鬼山、焼寺、退治山、勝埆（しょうざこ）などの地名があり、昭和 3 年の『三保村史』に桃太郎伝説と関連づけ

て述べられている。日本で一番早く書物に書かれた桃太郎伝説の地である。

DVD ③　高松と犬山


高松　橋本仙太郎氏

高松説は高松市鬼無（きなし）町周辺と女木島（鬼ヶ島）が舞台であり、吉備津彦命の弟である稚武彦（わかたけひこ）命が桃太郎のモデルで、女木島に住む鬼を桃太郎が退治、鬼無の地で鬼を全滅させ、鬼がいなくなったことから鬼無の地名がついたとの伝説がある。昭和 5 年に橋本仙太郎氏が論文を四国民報に掲載、この説が高松桃太郎の元になった。

犬山　川治宗一氏

犬山説は愛知県犬山市栗栖の桃太郎神社周辺であり、昭和初期に川治宗一氏や鳥瞰図家の吉田初三郎らが提唱、詩人の野口雨情が「犬山桃太郎音頭」を作詞するなど、他の伝説地に先駆けて全国に知られるようになった。桃太郎は木曽川の洗濯岩で拾った桃から誕生し、犬山、猿洞、雉ヶ棚から来た犬猿雉を連れて可児市の鬼ヶ島に出かけ、「取組」、「勝山」で戦い、得た宝を「宝積寺」で披露したなど、地名と結びつけて語られる。

岡山は鬼退治伝説がベースになるが、高松、犬山は地名を手がかりにして成立している。

DVD ④　そのほか全国の桃太郎ゆかりの地

岐阜県加茂郡川辺町（犬山の上流）、山梨県大月市周辺、宮城県石巻市、岐阜県中津川市、奈良県磯城郡田原本町などにも桃太郎伝説がある。このうち田原本町は岡山の桃太郎伝説を受けて、同町には吉備津彦命の父である孝霊天皇の宮があったことから、桃太郎誕生の地であると PR に努めている。

DVD ⑤　桃太郎を世界へ　小久保桃江

小久保桃江氏

小久保桃江氏（高梁市備中町出身、104 歳で没）は、人々の幸せの原点として桃太郎童話に注目し、日本桃太郎の会を創設して桃太郎の普及に努められた。

DVD ⑥　桃太郎の変遷　江戸から昭和へ桃太郎はどう描かれたか

桃太郎の誕生には果生型（流れてきた桃から生まれた）と回春型（お爺さんとお婆さんが流れてきた桃を食べて若返り、桃太郎が生まれた）がある。江戸時代には桃太郎に関する絵巻物が多数作られた。ある研究で 34 の絵巻物を調べたところ回春型が 19，果生型が 15 と回春型の方が多かった。今はもっぱら果生型になっているのは、明治以降に学校教育で桃太郎の童話が教えられるようになり、回春型では教育上まずいということになったからではないかとのこと。

また、桃太郎が戦前の一時期に軍国主義の高揚に利用されたことで、戦後しばらくは桃太郎の話がはばかられたこともあった。桃太郎像も時代の影響を強く受けてきたのである。

今の岡山県人なら誰でも桃太郎は岡山のものだと何となく思っていますが、今回の講演は桃太郎を多面的な視点から考えてみる良いきっかけになったのではないかと思います。講演後の質疑応答も活発で、その中で桃太郎伝説に類似の物話がインドや中国にも存在するとの話もありました。大変興味深い講演会であり、あらためて講師の古川さんにお礼を申し上げたいと思います。

祝　日本遺産認定!!

「桃太郎伝説」の生まれたまち　おかやま
～古代吉備の遺産が誘（いざな）う鬼退治の物語～

岡山市産業観光局商工観光部　プロモーション・MICE推進課

平成 30 年 5 月 24 日、文化庁が認定する「日本遺産」に、岡山市･倉敷市･総社市･赤磐市が申請した「**「桃太郎伝説」の生まれたまち　おかやま　～古代吉備の遺産が誘（いざな）う鬼退治の物語～**」が新たに認定されました。

今回の日本遺産認定を機に桃太郎伝説というストーリーと日本遺産ブランドをいかした更なる情報発信や構成文化財等の魅力アップ、そして観光客の受け入れ体制の整備を関係者のみなさまとともに進め、今後ますます多くの方々におかやまを訪れていただけるよう取り組んでいきます。

◆「日本遺産」とは

地域の歴史的魅力や特色を通じて我が国の文化・伝統を語るストーリーを「日本遺産」として文化庁が認定するものです。

◆認定されたストーリーの概要

いにしえに吉備（きび）と呼ばれた岡山。この地には吉備津彦命（きびつひこのみこと）による温羅（うら）と呼ばれた鬼を退治した伝説が語り継がれ、昔話桃太郎の原型になったとされる。伝説では、絶壁にそびえる古代山城は温羅の居城とされ、約 1800 年前の巨大墓に立ち並ぶ巨石は命（みこと）の楯（たて）となった。戦いの後、勝利した命（みこと）は巨大神殿に祀られ、敗れた温羅の首はその側に埋められ、この地で吉凶を占っている。

鬼退治伝説は古代吉備の繁栄と屈服の歴史を背景として生み出され、伝説の舞台となった吉備の多様な遺産は、今も訪れる人々を神秘的な物語へと誘（いざな）ってくれる。

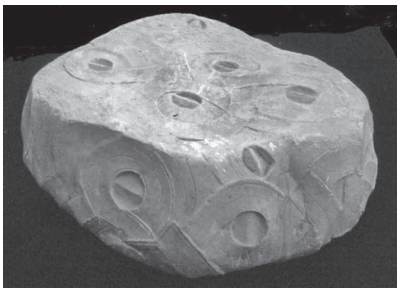
◆構成文化財（27件）

1　鬼城山（鬼ノ城）（総社市）

2　鬼の釜（総社市）

3　楯築遺跡（倉敷市）

4　楯築神社の旋帯文石（倉敷市）

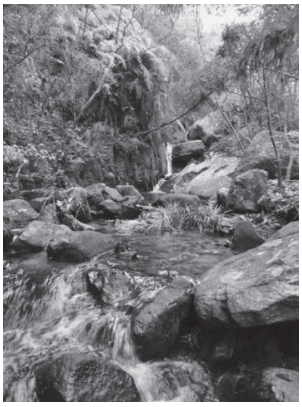


5　矢置岩と矢立の神事（岡山市）

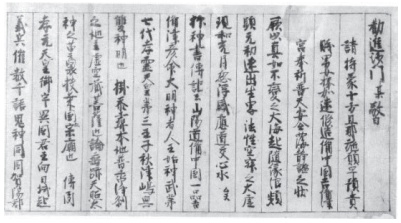
6　矢喰宮（岡山市）

7　鯉喰神社（倉敷市）

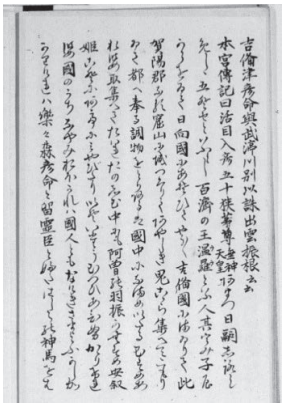
8　血吸川（岡山市、総社市）



9　吉備津宮勧進帳（岡山市）

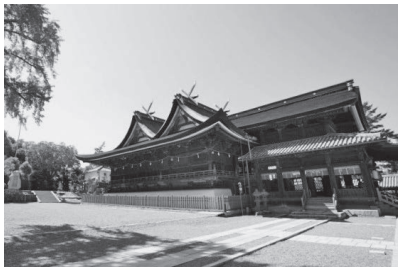


10　備中国大吉備津宮略記（岡山市）



11　吉備の中山（岡山市）

12　吉備津神社（岡山市）



13　吉備津神社御釜殿（岡山市）

14　鳴釜神事（岡山市）

15　吉備津神社境内古図（岡山市）

16　吉備津神社の鬼面（岡山市）

17　吉備津彦神社（岡山市）

18　特殊器台（岡山市）

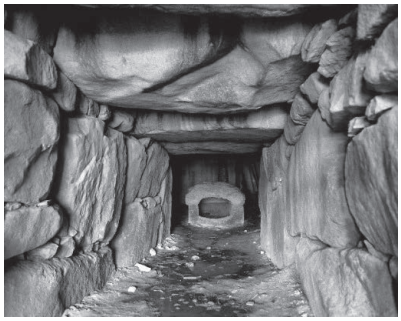
19　造山古墳　第一、二、三、四、五、六古墳（岡山市）

20　作山古墳　第一古墳（総社市）

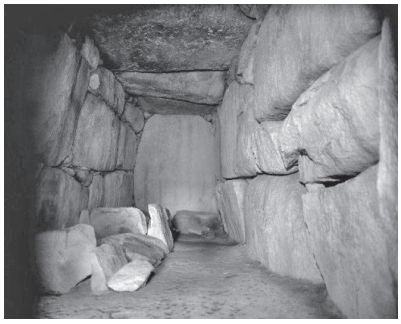
21　両宮山古墳（赤磐市）

22　こうもり塚古墳（総社市）

23　牟佐大塚古墳（岡山市）



24　箭田大塚古墳（倉敷市）



25　上東遺跡出土の桃の種（岡山市）

26　岡山の桃（岡山市、倉敷市、総社市、赤磐市）

27　きびだんご（岡山市、倉敷市、総社市）

シーボルトに関わる三人の美女の生涯
母タキ・娘イネ・孫タカコ（2回目）

神戸市　能勢（のせ）　初枝（はつえ）

娘（いね）の時代「生涯、一介の町医者でいたい」

◆　学問へのあこがれ

稲

シーボルトが去って、間もなく元号が改まって天保元年（1830）になった。

稲を連れて実家に帰ったタキは、何度か、シーボルトに手紙を書いた。もっともオランダ語の読み書きが出来ない彼女は、だれかに翻訳してもらわなければならないので、それも次第に間遠になった。

稲を生んでからのタキは、一段と色気が加わって、誰もが振り返る美しさだった。

叔父の勘助は、商売が順調だったので、タキは叔父の世話になり、店の手伝いをした。店に来る客の何人かは、美しいタキに目を付けて、嫁にという話が何度かあったが、タキの方で断わっていた。しかし、いつまでもこうして叔父の世話になってもいられないと思い始め、思い切って、地味だが実直な人柄の回船問屋の俵屋時次郎の許へ嫁ぐ決心をした。

タキの姉のツネは千歳という源氏名を持つ出島の遊女だが、オランダ人の薬剤師ビュルゲルと特別の関係になっていた。彼女も稲誕生の１年後に女児を生んだ。タマと名付けられた子は、稲とは違い金髪の巻き毛だった。長崎という町は、他市よりは混血児を特別扱いすることは少なかったが、金髪のタマは、「あいのこ」とからかわれることが多かった。稲は姉のような気持で、タマをかばった。

タマが４歳になったとき、母親のツネが病を得て亡くなり、タマも続いて亡くなった。稲は、妹のように可愛がっていたタマがいなくなり、淋しさは一通りではなかった。

この頃タキと時次郎の間に、文作という男の子が生まれた。

稲は、文作をおんぶして通りに出ると、寺子屋に通っている子どもたちに会う。

「私も、寺子屋に行って勉強したい」。

「女の子には、学問はいらない、もう少し大きくなったら、針仕事を覚え、三味線の稽古などをするがいい」と、タキは寺子屋には反対だったが、優しい義父の時次郎が「行けばいい」と寺子屋へ通わせてくれることになった。

稲はそこで父の国の言葉オランダ語を学べると思っていたが、当時の寺子屋では、論語など漢文と日本の古典の習得ばかりで、オランダ語は学べない。稲の期待は外れた。でも、どうしてもオランダ語を学びたい、父の国の言葉を学びたいという思いが強くなるばかりだった。

思春期を迎えた稲は、鏡に映る自分の顔が周囲の人とは違うことを自覚し始めた。「私は普通の人のように結婚できないのではないか」。

稲の記憶にはないが、人の話によると、父親のシーボルトはすぐれた学者だったという、お父さんのようになりたい。そして「私の生きる道は学問しかない」と思いはじめた。そして、オランダの学問、蘭学への憧れを抱き始める。

そういう稲をもてあましたタキは、シーボルトの弟子で、鳴滝塾の塾頭だったが、シーボルト事件後の処払いで四国の宇和島へ帰っている二宮敬作（にのみやけいさく）に、どうしたものかと、相談の手紙を書いた。

二宮は、稲が学問をしたがっていることをよろこんで、私の所へ預けてくださいと返事が来た。信頼できる敬作の元ならと、タキもようやく決心をした。

◆　産科医になる決心

時次郎が、仲間の回船問屋で四国へ向かう船便に頼み込んで、稲は長崎港から宇和島港へ無事に渡った。

敬作の出迎えを受けて、宇和島の二宮家で暮らすことになった。

二宮敬作は、郷里の宇和島で、名医としての評判を得ていた。彼は、忙しい診療の合間に稲にオランダ語も教え、治療なども見学させてくれた。敬作は稲が賢いこと、向学心をもっていることなどみてとった。

宇和島での暮しが 2 年、3 年となるうち、稲は、これから自分はどうすればいいのだろうと悩み始めた。

そんなある日、敬作が稲に言った。「稲さん、ここで蘭学を学んで、どうしたいのや」。稲は、はっきり答えられない。

「稲さん、あんたが医業を続けたいなら、私が思うには、あんたは産科の勉強をして、産科の女医になるのがええと思う。我が国では、女性たちはお産で命を落とす人が多い。それは女たちが、男の医者に診せることを恥かしがるからや。とくに性器を診せることをいやがって、産婆にまかせてしまう。しっかり医学の知識を持った医者、とくに女の産科医が必要なんや。」

稲は、この敬作の言葉に動かされて、産科医になりたいと思った。

「わたしに出来るでしょうか？」

「いまのままじゃ無理や。もっと勉強が必要や。産科なら、同じシーボルト先生の弟子の石井宗謙（そうけん）がええやろ。彼は今、岡山で開業してる。さっそく手紙を書くよ」。

石井宗謙からも、喜んで受け入れると返事が来た。

今後の方針も決まったことだし、母に報告もしたい、なにより会いたかった。長崎の母タキからも、弟の文作が病で亡くなったとの知らせがあった。

14 歳で長崎を出て宇和島に来て既に 4 年、稲は 18 歳になっていた。

帰って来た稲を見て、母はもちろん、祖父の左兵衛が「よか、よか」と何度も稲の手を握って涙を流した。父親シーボルトの記憶がない稲にとっては、祖父は父親のような存在だった。すっかり弱っていた左兵衛が亡くなったのは、年が明けて間もなくだったが、いかにも稲の帰りを待っていたかのような往生だった。

祖父の葬儀、四十九日の法要などすませて、心を残しながらも、新しい希望が待つ岡山へ旅立たのは、稲、19 歳の春だった。

◆　岡山の産科医石井宗謙のもとで

穏やかな瀬戸内の港、下津井（しもつい）港まで、手紙をくれた石井宗謙夫妻が迎えに出てくれた。そこから小舟に乗り換えて、旭川を上った岡山市の中心部に、彼の診療所はあった。

二宮敬作は、ごつい体格で、酒好きで時にハメをはずすこともあった豪快な気性の人だった。石井宗謙は背のすらりとした端正な紳士風で、酒よりも、稲は知らなかったが、無類の女好きだった。

産科医石井宗謙は寛政 8 年（1796）、岡山県勝山藩の漢方医の三男として生れた。18 歳で、父が亡くなった後、見よう見まねで覚えた医術で村医者をやっていたが、シーボルトの噂を聞いて長崎に赴き、鳴滝塾に入門を許された。

彼はオランダ語と産科の成績がとくに優秀だった。「日本産昆虫図説」「日本産蜘蛛図説」をオランダ語に訳して、シーボルトに提供するほどの語学力だった。

長崎から帰卿した彼を、勝山藩が二人扶持で藩医として召しかかえたが、シーボルトの弟子である自分にふさわしい待遇ではないと、不足を申し立てた。翌年五人扶持にまであげたが、それも不満で勝山を出て津山に移った。

津山藩士の芦沢藻織の妹しげと結婚したのは、天保 5 年（1834）、宗謙 39 歳の時。その後弘化 2 年（1845）には岡山に移り、岡山市下之町（しものちょう）で開業した。稲がやってきたのはそんな時で、宗謙は名医としてすこぶる繁盛していた。

勝山町教育委員会発行の『勝山が生んだ人物略伝』では、「西洋医学の発展に尽くした勝山藩医」としながらも、一方、宗謙を自分勝手な我儘な人物であったことを遠慮がちに書いている。

妻との間に子ができなかったこともあり、宗謙は勝山の染め物・薬草問屋万屋丈助の娘むろを妾にして、男児久吉（ひさきち）をもうけ養子にした。

久吉は 7 歳で、藩主の前で『孝経』を読む聡明さで神童と言われたが、父と違い、慎み深く謙虚な性格だった。

後に、江戸で箕作阮甫などにオランダ語を学び、桂川甫周の弟子になった。
その後、大坂で緒方洪庵の適塾に学び、いかんなく秀才ぶりを発揮して、塾頭の福沢諭吉を驚嘆させたという。
明治 3 年には、大学少教授となり、大阪医学校（大阪大学医学部の前身）校長になった。
稲と関わりが深くなるのは後のことで、当時は挨拶するだけの同居人だった。

野心家の宗謙は、日本ではシーボルトも成功しなかった種痘を試したいと熱望していたが、なかなか実験台になってくれる人がいない。ところが宗謙の熱意にほだされた医師仲間の杉生革斎は進取な気性の人で、医学のためにと自分の娘を提供した。宗謙は彼の 4 人の娘に次々治験して、3 人まで成功した。
天然痘にかかった牛の瘡蓋が入手できないので、天然痘に罹患したヒトの瘡蓋を粉にして、実験者の鼻孔に吹き込む方法を試した。3 人の娘にうまく種痘が成功したので、4 人目にも同じ方法で試みたところ、末娘は真性の天然痘にかかって命を落とした。
それに凝りてか、以後種痘の研究から手を引いたが、亡くなった娘に哀悼の情を示そうともしない宗謙に、稲は疑念を抱いた。しかしいまは彼の知識と技術を学ぶことに集中する時だと自分に言い聞かせた。

◆　狂わされた運命

稲は、宗謙から与えられた「漢書の医学書を写すという課題」に夜遅くまで取り組み、懸命に励んだ。
同じ屋根の下で、養子の久吉も机に向かっているらしく、深夜まで灯りがともっていた。
漢書医学書の書写もすすみ、昼は宗謙のお供で出産に付き添うことも許されるようになり、いずれ独り立ちが許されるのではなかろうかと、稲は希望に満ちた日々を過ごしていた。
そんな時、稲の元へ母のタキから「夫の時次郎が亡くなり、商売替えをしたい。その前に岡山へ行って、お前に会いたい」という便りが届いた。時次郎の死は悲しかったが、母に会えるのは嬉しかった。
やってきたタキを、宗謙夫妻もおおいにもてなし、タキもはるばる来てよかったと、しばらく滞在して、満足して長崎へ帰った。

下津井の港まで、タキを見送った帰り、小舟の中で、稲は宗謙に暴力で犯されるという思いがけない出来事に見舞われた。

このあたりのことを、晩年、娘の高子（タダ子）が、長崎の歴史家古賀十二郎に語り、彼が書き留めたといわれるものが残っている。
「母イネト石井宗謙トノ関係ヲ申シマセウ。母ハ石井宗謙ヲ頼ッテ医術ノ研究ニ従事スルコトニナリマシタ。シーボルトガ石井ヲ見込ンデ頼ンダノカモ知レマセン。祖母タキハ母イネノ具合ヲ見ルタメニ石井宅ヘハルバル尋ネテイキマシタ。而シテ母イネノ修業ノサマヲ見届ケ、漸ク安心致シマシテ、天神丸トイフ船デ長崎ヘ帰リマシタ。
ソノ際、母ハ石井ト共ニ船ニ乗リマシテ、祖母ヲ見送リマシタ。天神丸ガ帆ヲ上テ出航シ、母ハ石井ト二人帰リマス途中、船中デロ説カレマシタガ、母ハ石井ヲ嫌ヒマシテ、懐中ニシタ短刀ヲモッテ野獣ノヤウナ石井ヲフセギマシタケレドモ、石井ノ暴力ニ抵抗デキズ、トウトウ処女ノ誇貞操ヲ奪ハレマシタ。
母ハソノ後、小倉左伝太ト申ス者ノ部屋ニ居マシタ。コノ部屋ト言ウノハ長屋部屋デシタ。母ハ一度宗謙ニ姦淫サレマシタノデ、其ノ後ハ一度モ石井ト肉交ハアリマセンデシタ。母ハ石井ヲ蛇蝎ノヤウニ嫌ッテイタノデス。」

この記録は、郷土史家の古賀の筆だが、高子の言葉にかなり忠実で、内容的もこうだったのであろう。
吉村昭はその著書『ほおんしいぼるとの娘』で、宗謙が「すきだ、前からすきだった」と言っていきなり、船中で襲って来たと書いている。突然のことで、稲は抵抗する間も、力もなかった。

宗謙の顔も見たくない稲は、石井家を出て裏長屋に移った。宗謙は、稲の悔しさや絶望が理解できず、このまま自分の傍にいてほしいと、度々申し出たが稲は断った。
ところが、なんとたった一度の行為で、稲は妊娠してしまった。
「母ハ、遂ニ妊娠イタシマシタ。而シテ私ヲ生ンダノデス。」
屈辱と絶望の中で、何度か堕胎を考えたが、人の生を助ける仕事をする自分が、命を粗末にしていいのかと悩

み苦しんだ。
　そのうち、お腹の中で日々育って行く胎児の気配に、これも天命だろうと、あきらめの境地になった。
　宗謙の妻しげは優しい人で、心から心配して、手伝いの女中をよこした。稲は、この女中だけを相手に、たった一人で裏長屋で出産した。
「母ハ産婆ヲ呼バズ、自分デ臍ノ緒ヲ切ッタノデス。」
　生まれて来た子に、何の感慨もない稲は、赤ん坊をただの赤ん坊だと、「タダ」と呼んだ。
　石井夫妻は、赤ん坊を引き取りたいと申し出たが稲は拒否して、首がすわったばかりのタダを抱いて、長崎へ帰った。（タダは、後に高子と改名）
　船着場へ見送りに来ていた石井宗謙に、稲は「ひとでなし！」という言葉を投げつけて船に乗った。
　嘉永 4 年（1851）9 月のことだった。

　この後、宗謙が、更に、もう一人妾をこしらえて女児を生ませたが、妻のしげは、なにも言わず、耐えて妻の座を守り通したという。

◆　尊王攘夷が入り乱れる長崎に帰って

　タダ子を抱いて帰って来た稲に、驚きはしたが、タキをはじめ郷里の人々は優しかった。
　当時の長崎は、尊王攘夷と騒がしく、全国から武士や墨客が集まる町であり、異国船が数多く碇泊していた。坂本龍馬、村田蔵六など憂国の志士等もやって来て、長崎の町は政治のるつぼと化していた。

　稲は、長崎へ帰って、母の元へ身を寄せたものの、何もする気力がでない、いつまでもぼんやりしている。そんな稲を見かねて、タキは産科修業をもう一度始めてはとすすめた。母の言葉におされて、やっと稲は播磨町の阿部魯庵のところへ産科修業に通うことにした。生活力旺盛なタキは、小料理屋をやりながら孫タダ子の世話を引き受けた。
　タダ子は幼児だが、だれもが思わず惹き付けられる可愛い子だった。綺麗な眸と稲に似た白い肌、そうして髪は、稲よりもタキに似て黒い。母親稲と祖母タキの美しさが、そのままタダ子にやさしく移った可愛らしさだった。

　寛永 5 年（1852）11 月、二宮敬作が、宇和島藩主の命で長崎へやってきた。
　二宮敬作は、高野長英を匿ったこともあったが、宇和島藩の伊達宗城（だてむねなり）は、開明的な殿様でこれからは船だと、敬作に蒸気船について調べて来るようにと命じた。
　村田蔵六（後の大村益次郎）に蒸気船に関する知識を学びに来たのだった。彼は、甥の弁次郎など、将来を嘱望されている藩の若手数名を伴ってやってきた。

　米使節ペリーやロシア使節プチャーチンなど、幕府の定まらない方針に右往左往させられていた外国との交渉係として、川路聖謨、筒井政憲が来たのはこの頃だが、政府の交渉係の随員としてやってきた箕作阮甫（みつくりげんぽ）が、石井宗謙が稲の女児を引き取りたいという書状を持参した。当然、稲は応じなかった。
　阮甫は、その時の稲の印象を、
「容貌妍美（けんび）（雅で美しい）、身体斤長（きんちょう）（背が高くかっこいい）、風神俊爽（しゅんそう）（容姿がとくに美しい）、長崎にては第一の美人と謂うも可なり」と『西往紀行』に記している。稲は凛とした美人だった。

　二宮敬作は、石井の破廉恥な行為によって、稲がタダ子を産んだことを知って、自分の配慮の足りなさを、稲とタキに心からわびた。
　そして敬作は、暇をみつけては、弁次郎を伴って稲をたずねて来た。
「ところで、稲さん、弁次郎は、長崎にいる間にオランダ語を学びたい希望があるそうなんや、村田蔵六先生に頼みたいと思っているんやが、稲さんはどうかな」と敬作が稲を誘った。
「私も岡山でやりかけていたオランダ語を続けたいので、ぜひご一緒させてください」。稲は答えた。
　弁次郎と稲は、一緒に村田蔵六の塾へ通った。
　弁次郎は、稲より十数歳以上若い、しかもオランダ語ばかりか、英語、ドイツ語など、あらゆる語学の才能があり、語学の天才だといってもいい。その才能が、のちの禍をもたらすことになるのだが、それは少し先のことだ。

稲は、そんな弁次郎に恋心に似た憧れを抱いた。しかしあまりにも年が離れている、しかも自分はあいの子だ。彼女は自分の心に蓋をして、娘のタダ子が成人した暁には、弁次郎のお嫁さんにしたいと真剣に思った。

塾の帰り道、自然に将来の話になった時、弁次郎にそれを告げると、彼はいとも簡単に承諾した。

稲はほっとしながらも、胸の奥に一抹の淋しさを感じていた。

◆　シーボルトの再来日

二宮敬作の長崎での任務も、終りに近づいてきたとき、敬作が言う。

「どうだい、稲さん、宇和島へ来ないか、むこうで産科を開業すればいい」。

それは、魅力的な誘いだったが、迷っていた稲に、思いも掛けないニュースが飛び込んできた。シーボルトが、日本へ来ると言うのだ。父に別れた時は、二つになったばかり、記憶の中にはないが、他の人の話を聞いて、稲の中で無限の憧れの人になっていた。

一度、大洲に帰っていた敬作たちも、シーボルトの来日の噂に、先生に逢えるならと、かつての塾生何人かに連絡して、長崎へ来て、待ち構えることになった。多くの弟子がやって来たが、石井宗謙は来なかった。

寛永 6 年（1853）7 月、待ちに待ったシーボルトが、息子のアレキサンデルを連れて長崎の港に着いた。

何度も夢に見た父シーボルト、稲には聞きたいこと、言いたいことが胸に溢れていた。しかし、62 才のシーボルトには、昔の輝きはなかった。そればかりか、身の回りの世話をさせるために雇った 16 才の漁師の娘シオとの間に男女の関係があることを知って、潔癖な稲は怒り心頭だった。

父の荷物の中にあった七宝の髪飾りをシオが刺して、愛人然と振る舞っている。あの髪飾りは、タダ子にくれるものだと思っていた。稲の怒りは、シーボルトには伝わらないばかりか、母親タキも、敬作も、平静でいるのが稲には許せないことに思えた。

稲は、シオ以外の娘とみを、シーボルトの元に送り込んで、シオを排除しようとしたが、逆にシオがとみを解雇した。

稲とシーボルトの確執を心配した敬作が、間に入って話をしたところ、シオが妊娠していることがわかった。結局、シオは親元へ帰されたが、とみが次のシーボルトの相手になった。

「外国の男は、旺盛だから…」敬作もあきれ顔だ。

里へ帰されたシオにとっても、かなり辛い人生になることへの思いやりは、この時の稲にはない。父親への憧れが、無惨な幻滅に終わって、傷ついた自分が哀れなばかりだった。

◆　弁次郎（三瀬周三）の災難と　シーボルト解任

敬作の甥、三瀬弁次郎の才能を見込んだシーボルトは、子のアレキサンデルの日本語教師を任じた。アレキサンデルの後年の日記によると、この日本人先生は恐ろしく精励恪勤な人で、アルキサンデルは遊ぶひまもなく閉口したらしい。彼の日本文典の蘭訳(安政 6 年)は、この遊び好きの弟子に日本語を教へるために作ったものだが、翌年には「日蘭英佛辞典」を完成している。

語学ばかりか、シーボルトに学んだ科学の実験も行っている。

電信の黎明の碑

安政 5 年（1858）、郷里伊予の大洲で、電信の実験をした。この実験には、故郷の人々が興味を持ち 40 人もが協力したという。古学堂から肱川の河川敷まで十数丁に電線を架設しての、電信（針金便り）実験は成功した。これは日本で最初のもので、藩はその業績を顕彰して、大洲の浜に碑を建てている。

文久元年（1861）5 月、シーボルトは幕府の閣老安藤対馬守の招きで外事顧問の役を任じられて、江戸に向かうことになった。

その際、語学の天才弁次郎を呼び寄せて、通詞として伴った。弁次郎は江戸へ行く前に、三瀬周三（みせしゅうぞう）と改名し、シーボルトの子アレキサンデルと共にシーボルトに従った。

江戸に赴いて、将軍にまみえる時、周三は広間の外で控えていた。中には通詞が 7、8 人いたが、下手な通訳で、お互いの話が通じない。シーボルトはたまらず「周三を呼べ！周三を呼べ！」と声高に叫で、周三を広間へ呼び出した。彼が通訳をすると、お互いにスッキリと解りあえて、おおいに満足したという。それを見た幕府の通詞

たちは残念がって周三をねたんだとか。
　そのころ、攘夷派の水戸浪士が襲撃するといふデマが盛んだった。周三はシーボルトの日本研究を助け、日本歴史及び幕府成立史を蘭譯しながらも、いつも辞世を書いていたという。

　しかし、残念ながら、当時の日本では、もうシーボルトの学識は不要になっていたばかりか、攘夷派の水戸浪士の襲撃の噂など不穏な世情もあって、シーボルトは解任されてしまった。
　この時、語学の達者な周三は、怪しいと思われて、江戸の大洲藩の座敷牢に留め置かれた。シーボルトは、その彼を残して長崎に帰って来た、当然、たきや稲にひどく責められた。
　当時 9 歳だった高子は、そのときのことを、「ぢい（孫の高子はシーボルトのことをこう呼んでいた）は、周三を牢から出して貰ってつれて長崎へ帰ろうと、嘆願書を差し出し、牢の番人にたくさんお金を使いましたが、許されず力をおとして長崎へ帰りました。その時のことを私は覚えております。
　ばば（タキ子）がぢいに取りすがって、何故周三を助けてつれて来なかったかと泣きながら、しきりに責めました。ぢいは涙を流して「ワタシ、シリマセン、シリマセン」と言って泣きました、母（稲）もぢいに取りすがり、3 人とも抱き合って泣いていました。私はその側で、そのけんかを見ていました。」と言い、「最初、周三は座敷牢に入れられました、これは日本の大切なことが周三に解ってしまった以上、周三を帰すわけにはいかぬ、殺してしまへということになったからでした。」とも言っている。
　また藩邸の座敷牢にいたとき、オランダのコンシル（指揮官）が、ひそかに長持をもって周三を盗みに来て、監獄に入れられると、きっと殺されるから、この長持に這入って逃げた方がよい。荷物としてオランダの船につみ込み本国につれ帰って安全に保護しようと言った。しかし周三は、大和魂をもっているものが、そのやうな卑怯なことはしない。日本に生まれたものが日本の国法を逃れて、西洋へ逃げて行くのは国に対して申しわけがたたぬと言って断ったとも。
　ただ周三には罪をおかしてないという自信があったので、すぐ釈放されると思っていたはず。しかし、いつまでも留め置かれるので馬鹿らしくなって勝手に藩邸を抜け出した。それが役人たちの心証を害して、「石川島人足寄場」に送られることになった。
「そのときには、大勢の見物人が周三を見に来ましたが、周三は少しも恥かしいとは思はず、その大勢の見物人をグッとにらみつけてやったそうです」と、高子は語っている。
　しかし「石川島人足寄場」は、最低の留置場でひどく不潔だった。彼は疥癬に罹り、悪化して一度は入院したが、回復すると再び収監された。
　そこで周三は、囚人たちの看病に当たり、当局に環境改善を求めた。

　ところで、シーボルトは、周三が釈放されるより前、文久 2 年（1862）オランダに呼び戻された。そして、その 4 年後にドイツで亡くなった。
　さらに周三の叔父の二宮敬作は、同志だった高野長英が、官権に追われるのを、宇和島でひそかに匿うなど新しい国づくりを目指していたが、シーボルトが帰国した日、悩卒中で倒れ、そのまま長崎で没した。彼は、極度の酒好きで、ときに酒乱的な言動が伝えられている。
　稲の母タキも、老いて頼りにならない。頼れるものはなにもないが、稲は、周三釈放のため、東奔西走あらゆる手だてを講じた。
　やっと、周三の能力を高く買っていた宇和島藩主伊達宗城（だてむねなり）の力で解放されたのは、元治元年（1864）8 月だった。周三は 4 年間、無実で拘留されていたことになる。
　三瀬周三は、解放されると、すぐさま宇和島藩蘭学稽古場の教官に取り立てられた。
　慶応 3 年、大政奉還後は、藩命で長崎、続いて大阪、京都など各地に赴くが、明治元年（1868）、稲の希望の通り、城主宗城夫妻の媒酌で、高子と結婚した。
　この時、高子は数え年で 15 才だった。
　また、藩主宗城は、シーボルトをもじって朱本（しほん）と名乗っていた稲に、楠本の姓を与え、正式名を懿徳（いとく）とするようにと命じた。タダ子も高子と改名させた。

◆　稲の恋人はだれ？

　ところで、稲ほどの人に、恋人の噂がないのは淋しい。

司馬遼太郎は、稲の恋人を大村益次郎だとしているが、それは諸般の状況から考えて無理だろう。三瀬周三に、恋心を抱いたのは昔のこと。周三と高子が幸せな生活を送ることが稲の幸せなのだ。

稲の恋人は大野昌三郎（おおのしょうざぶろう）だという記事を『江戸時代の人づくり風土記 38・愛媛』という本に見つけた。

この書物では、「この頃、宇和島藩は洋学の開花期を迎えていた。嘉永元年、シーボルトの門下の高野長英がひそかに伊東瑞渓（いとうずいけい）と変名して宇和島に来藩し、蘭学塾後岳堂（ごがくどう）を開く。その門下から、後に中浜万次郎（なかはままんじろう）（ジョン・万次郎）に英語を学ぶ大野昌三郎が出る。元治元年、昌三郎と稲は結婚、同棲し、娘の高子も宇和島に連れて来た」となっている。

高野長英居住跡、宇和島市内の一般住宅の前に建つ碑。

ここが蘭学塾跡か、二宮敬作宅跡かどうかわからないが、二十年以上前、四国を旅した時、筆者が探した。

あり得えないことではないだろう。元治元年は、周三が釈放され、宇和島の蘭学稽古場で教え始めていた時期で、稲は宇和島で産科を開業したと思われる。その後、高子を長崎から連れて来て、藩主夫妻の媒酌で周三と祝言をあげたことになる。二宮敬作が高野長英を匿ったことは、先に書いた通りなので、かなり信憑性は感じられる。

ただ、その後、稲と昌三郎はどうなったか。恋人ではあったかもしれないが、結婚はしていないだろう。それについてはどこにも記録がない。

一方、慶応元年には、イギリス公使パークスが、3 隻の船で宇和島を訪れ、藩主伊達宗城を表敬訪問している、そのとき、周三、昌三郎と、日本に残っていたシーボルトの息子アレキサンデルの 3 人が通訳をしたという記録がある。

シーボルトは在日中に、息子アレキサンデルに語学を教えてほしいと周三に頼み、周三は引き受けたが、アレキサンデルが覚えが悪いと嘆いたこと、一方アレキサンデルは、周三のことを厳しすぎる先生だと嘆いていたことは前にも書いた。彼等 3 人に接点があったのはたしかだ。

◆　稲、皇女の出産に立会う

少々後のことになるが、上京して、ほとんど寝食を忘れて働いていた産科医楠本稲の評判は、都でも知られていたらしく、明治 7 年、政府から宮内庁御用係を命じられる。

明治天皇の側室権典侍（ごんのすけ）柳原愛子に懐妊の兆があり、稲はその出産立会い産科医に選ばれたのだ。

明治天皇は、これまでに二人の皇子皇女を死産で失っていたので、この度の出産におおいに期待を持っておられた。明治 8 年 1 月 21 日、健康な第二皇女が誕生し、立派に役目を果たしたとして、稲は金百円の報奨金をいただいた。

しかし残念だが、薫子（かおるこ）と名付けられたこの内親王も生後数ヶ月で脳症に罹り 1 歳半で亡くなった。柳原愛子は続いてもう一人皇女を生んだがそれも育たなかった。ちなみに明治天皇は他の側室によって、その後 8 人の皇子皇女をもうけたがいずれも夭折した。一説には、乳母たちのおしろいに亜鉛が使われていたのが、その原因だという説もある。

明治 12 年、柳原愛子が第三子として生んだ明宮嘉仁（あきのみやよしひと）親王のみが、唯一成人されて、大正天皇となった。ドナルド・キーンの『明治天皇』によると、明宮も幼少のおり、脳膜炎を患ったが幸い命を取りとめた。後遺症で少し体が傾ぐ傾向が残ったらしいが、昭和天皇をはじめ健康な皇子皇女が何人も誕生していることから、他には異常はなかったと思われる。

ただ、柳原愛子は、明宮出産後、極度のヒステリーをおこして、ついに命を落したと伝えられている。

稲を宮内庁に推薦したのは福沢諭吉だった。

福沢は、稲に産科の専門病院を作ることを強く奨めた。だが稲からは返事がない。福沢は、石井信義を稲のもとへ赴かせて、あらためて自分の希望を伝えさせた。稲は「私は一生、市井（しせい）の医者でいたい」と答えた。

当時、女性の中からも正式な医学教育を受けた女医、萩野吟子などが現れ始めていた。稲はあくまで実際の診察で覚えたに過ぎない自分の知識や技量が新しい医学からは遅れていると思っていた。

さらに彼女は病院の経営などより、直接患者を診ることが好きだった。福沢諭吉は失望したが、稲の決心が固いことを知って諦めたという。

（つづく）

井原市立 田中（でんちゅう）美術館

学芸員　*田中　純一朗*

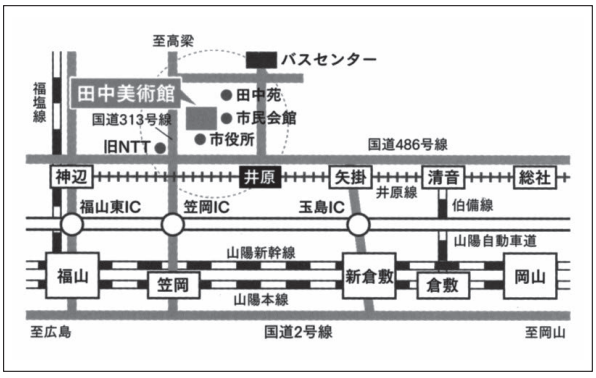
井原市立田中美術館は、井原市出身の彫刻家・平櫛田中（1872 ～ 1979）の作品を収集し、展示活動を通じて永くその芸術を顕彰するために、昭和 44 年（1969 年）に設立されました。開館から、来年でちょうど 50 周年を迎える歴史ある美術館です。

館名の略称である「田中美術館」、あるいは「田中館」が愛称になっていますが、遠方から来たお客様には「たなか美術館」と読まれてしまうこともしばしば。そもそもこの変わった雅号には由来があります。もともと井原の田中家に生まれ、福山の平櫛家に養子に行き、上京して彫刻家としての活動を始めてから「平櫛田中」と名乗るようになりました（当初は「平櫛田仲」と号していました）。自分の生家の名字を雅号にしていたわけです。

当館のコレクションは、平櫛田中の初期から晩年までの彫刻がメインとなっています。開館して間もないころは、平櫛田中が市内の学校や文化施設に寄贈した作品、開館に際して新たに寄贈された作品を展示していましたが、現在ではコレクションにも厚みがまし、約 400 点の平櫛田中作品を収蔵しています。彫刻だけでなく、「いまやらねばいつできる　わしがやらねばだれがやる」や「六十七十はなたれ小僧　男ざかりは百から百から」といった自省の言葉が記された書も魅力的です。さらに、平櫛田中が愛蔵していた書画や仏像、近代彫刻などに加え、昭和 58 年（1983）の新館（現本館）オープン時に寄贈された日本美術院の作家たちの日本画など、多様なコレクションが形成されてきました。

平櫛田中の作品をいくつか紹介しましょう。初期の作品である《幼児狗張子》は、長男の俊郎をモデルにした写実的な作風の彫刻です。そっと手を差し出す仕草とあどけない表情、愛する子どもの姿を情感豊かに彫り上げた作品であり、発表時に宮内省の買い上げとなりました。ただその後、俊郎は成年に達することなく亡くなります。107 歳まで生きた平櫛田中は、息子から命を分けてもらったという気持ちで制作に励んでいたようです。

もう一点、六代目尾上菊五郎（1885 ～ 1949）をモデルにした《試作鏡獅子》があります。六代目菊五郎の当たり役であった「春興鏡獅子」を見た平櫛田中は、一か月近く歌舞伎座に通ってつぶさにその姿を観察します。そして菊五郎本人にモデルを頼み、その過程で多くの試作品が作られました。なかでも《試作鏡獅子》は同型の作品の存在が多数確認されており、当館が所蔵する《試作鏡獅子》が最も早い時期に制作されたものとして知られています。試行錯誤を重ね、20 年近い歳月をかけた完成作《鏡獅子》は、現在、東京の国立劇場で見ることができます。



平成 31 年（2019）には、開館 50 周年記念特別展「没後 40 年　平櫛田中――美の軌跡」の開催を予定しています。日本の近代美術に大きな足跡を残した平櫛田中の芸術を、生まれ故郷である井原の地でご堪能いただければ幸いです。

秋の歴史探訪「小豆島の歴史と文化探訪」ご案内

探訪先：香川県土庄町＆小豆島町 方面
（新岡山港からフェリーで土庄港へ渡る）
日　時：平成 30 年 9 月 30 日（日）6:30 ～ 19:00
（雨天決行）
定　員：53 名（先着順、定員になり次第締切り）
集合場所＆時間：
倉敷駅北口高速バス乗降場 6:30　及び
岡山駅西口バス乗降場 7:00
帰着時間：岡山駅 18:10　倉敷駅 19:00 頃
参加費：会員 5,500 円、一般 6,000 円
（フェリー代込み）
弁当、飲み物は各自持参、当日集金
㊟当日キャンセルは後日徴収

訪問先：

- 「宝生院の真柏」樹齢 1,500 年以上といわれる国指定特別天然記念物の世界最大のシンパク。
- 「肥土山の農村歌舞伎舞台」17 世紀から今日まで上演されている国指定重要有形民俗文化財。
- 「四方指展望台（昼食）」標高 770 m愛称美しの原高原、小豆島の景色を一望できる展望台
- 「大坂城の石切丁場跡」国指定史跡。大坂城の秀吉築城、徳川の修築で大坂に向け石材切り出す。
- 「二十四の瞳、岬の分校」12 人の子どもたちの心温まる面影を残したまま保存された教室
- 「醤油工場」400 年伝統の伝統を誇る小豆島を代表する産業の醤油、見学とショッピング。

参加希望者は以下の項目を　電話、Ｅメール、はがき、ＦＡＸ等でお申込み下さい。

また、同伴者のある場合は連名でお申込み下さい。

- 〒住所・名前・バス乗車駅（岡山駅西口 or 倉敷駅北口　を記入）・電話番号（携帯でも可）

申込み先：

- 電　話：090-4654-8964（工藤　博）
- Ｅメール：sw225442@tw.drive-net.jp（工藤　博）
- はがき：〒710-0803　倉敷市中島2007-8（工藤　博）
- ＦＡＸ：086-466-0192　（工藤　博）

編集後記

大田会長が自社の会社運営、古里、川上町の創生に力を注ぎたいとのことで、会長を降りられ、新会長に石井保氏が就任されました。石井氏は高梁市在住、高梁山田方谷会の副会長をされており、今後のご活躍を期待しています。

定期総会での記念講演で、岡山県立記録資料館々長の定兼学氏が「維新前後それぞれの願いを探る」と題して講演。明治初期、廃藩から岡山県に収斂するまで、県内のあちこちで、行きつ戻りつを繰り返しつつ維新が進んでいったことを 6 編の資料を基に話された。歴史の重み、実態を感じた。

3 月 31 日には講演会シリーズ「岡山の底力」が始まり、臼井洋輔先生が「スピリット　オブ　オカヤマ」と題する講演を行い、続いて若手文化・芸術関係者との座談会を行った。次回が楽しみ。

5 月の歴研サロンで、古川克行氏が「どこで生まれた桃太郎さん」と題する講演を、ビデオを使って行った。岡山、高松、犬山が三大伝説の地とのこと。

折しも、去る 5 月 24 日、「桃太郎伝説」の生まれたまち　おかやま～古代吉備の遺跡が誘う鬼退治の物語～が日本遺産に認定されました。（楠）

発　行　岡山歴史研究会
会　長　石井　保
編集長　楠　敏明
事務局　〒702-8002 岡山市中区桑野504-1
山崎泰二方
自宅電話（兼用）086-276-6654
ＦＡＸ（専用）　086-276-2241
ホームページ　http：//b.okareki.net/